外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う外国語活動の指導の工夫
― 教科の学習内容と言語活動を関連付けた単元づくりを通して ―

安芸高田市立甲田小学校　原田　真紀

研究の要約

本研究は，外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う外国語活動の指導の工夫について考察したものである。本研究では，児童が様々な驚きや発見に出会い，知的好奇心が高まっている理科の「季節と生き物」の単元の学習内容と言語活動を関連付けた単元を構成し，授業を実施した。その結果，児童はコミュニケーションを行う場面で，相手意識をもち推測力を働かせて聞いたり，自分なりに工夫して伝えたりする姿が見られた。このことから，教科の学習内容と言語活動を関連付けた単元づくりは，外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であるといえる。また，本研究を通して，言語活動を関連付ける教科の学習内容を決める視点や言語材料を精選する視点を明らかにし，まとめることができた。この視点は，今後，理科や理科以外の教科等の学習内容と言語活動を関連付けた単元づくりをする際に有効であると考える。

Ⅰ　主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示）の外国語活動では，「思考力，判断力，表現力等」の育成に関わる目標として，「（２）身近で簡単な事柄について，外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。」[1)]と示されている。

所属校高学年に行ったアンケートでは，「外国語活動の時間を楽しみにしている」の質問項目に対して，90％以上の児童が肯定的な回答をしており，外国語活動の時間におけるゲーム等の活動は楽しんで行っている。しかし，ＡＬＴに話しかけられると戸惑いを見せたり，ＨＲＴが日本語に訳すことを待っていたりする様子が見られる。これらの様子から，児童は，英語を聞いたり，英語で自分の考えや気持ちを表したりすることに苦手意識を感じていると考えられる。その要因として，外国語活動の時間で扱う題材や言語活動が，児童が伝え合いたいと思える内容になっていないことが考えられる。

小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（平成29年，以下「ガイドブック」とする。）では，児童の興味・関心，実態を踏まえた知的好奇心を満足させるような外国語活動の時間を創造する必要があるとし，そのためには，他教科との連携を図ることが大切であると示されている。そこで，本研究では，児童にとって身近で馴染みのある自然や生き物を扱う理科の学習内容と外国語活動における言語活動を関連付けた単元を構成し，授業を実施する。児童が伝えたいという思いをもって，考え，表現しようとすることで，自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地が養われると考える。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことについて

(1) 外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地とは

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編（平成30年，以下「29年解説」とする。）では，外国語活動の「思考力，判断力，表現力等」に関わる目標として「身近で簡単な事柄について，外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。」[2)]と示されている。また内容については，二つの項目が示されている。一つ目の「ア　自分のことや身近で簡単な事柄について，簡単な語句や基本的な表現を使って，相手に配慮しながら，伝え合うこと。」[3)]については，英語を使ってやり取りをする際に，伝え合う相手を意識することが重要であると示されている。このことについて，狩野晶子（2017）は，相手に配慮して伝え合うには，「誰に」「何のために」

伝えるのかに意識を向けさせる必要があり，その意識付けこそがコミュニケーションを行う素地となると述べている。

二つ目の「イ　身近で簡単な事柄について，自分の考えや気持ちなどが伝わるよう，工夫して質問をしたり質問に答えたりすること。」[4]については，「外国語によるコミュニケーションを円滑に行うためには，どうすれば相手により伝わるかを思考しながら，表現する内容や表現方法を自己選択し，尋ねたり答えたりするようにすることが大切である。」[5]と示されている。このことについて，吉田研作（2017）は，人間のコミュニケーションには「推測力」が不可欠であるとし，言葉が話された文脈や話し方などから相手が伝えようとしている意味や意図を推し量る力が非常に大切だと述べている。

また，卯城祐司（2013）は，言語も文化も異なる相手と，すれ違いや誤解にくじけないで相手の伝えることを積極的に聞こうとし，また相手には分かりやすく伝えるよう努める相互理解の姿勢を学ぶのが外国語活動であると述べている。そして，この具体的な姿として，自分の英語が相手に伝わらない時には，もう一度大きな声で話してみる，ゆっくり繰り返す，単語や表現の一部だけ言ってみる，ジェスチャーする，擬音を使う，絵に描いて見せるなど様々な試みを行うことを挙げている。

以上のことから，本研究における外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地とは，英語を用いてコミュニケーションする中で，「誰に」「何のために」伝えるのかを意識し，表現する内容や表現方法を自己選択し，自分なりに工夫して伝えたり，推測力を働かせて聞いたりすることと定義する。

(2) 外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うためには

「ガイドブック」では，「学習指導要領の外国語活動及び外国語科においては，言語活動は，『実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う』活動を意味する。」[6]と示されている。「29年解説」では「思考力，判断力，表現力等」を育成するに当たり，「知識及び技能」に示す事項を活用して，中学年の外国語活動の英語の目標に掲げられた「聞くこと」，「話すこと［やり取り］」及び「話すこと［発表］」の三つの領域ごとの具体的な「言語活動に関する事項」に示された言語活動を通して指導することと示されている。また，「言語活動を設定するに当たっては，児童が興味・関心をもつ題材を扱い，聞いたり話したりする必然性のある体験的な活動を設定することが大切である。」[7]と示されている。

狩野（2017）は，コミュニケーションを行う目的や必然性がある場面での，意味のあるコミュニケーションを通してこそ，「思考力，判断力，表現力」が養われ得ると述べている。また，互いに伝えたいことがあり，「わかりたい」「伝えたい」という気持ちから「これってどういう意味なんだろう？」「どう言ったら伝わるかな？」「これって英語でなんて言うんだろう？」などの声が児童の間で上がるような場面や状況を，教室の学びの中で実現させることが求められると述べている。

また，二五義博（2015）は，児童は，担任教諭から多くの教科を学んでいることもあり，英語の授業と他教科の学習内容を連携させることが，学習指導全体の効率性の面でも児童の動機付けの面でも有効であると述べている。

「29年解説」の「指導計画の作成上の配慮事項」には，「エ　言語活動で扱う題材は，児童の興味・関心にあったものとし，国語科や音楽科，図画工作科など，他教科等で児童が学習したことを活用したり，学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。」[8]とあり，言語活動で扱う題材について，他教科等との関連が示されている。

さらに，「ガイドブック」でも，「他教科等で学習したことは，児童の発達段階に応じた内容であり，児童の知的好奇心に沿ったものであることが多い。したがって，『聞いて知りたい』『話して教えてあげたい』という児童の意欲を高めることが期待できる。」[9]と示されている。そして，「新しい題材で単元を始める時に，児童が他教科等ですでに学習して知っている内容であれば，安心して英語そのものに注意を向けやすくなる。その英語がさらに，新しい言語材料でも，話されている内容（既知の内容）と関連付けて，当該言語材料の意味を予測することができる。」[10]と示されている。

これらのことから，他教科等の学習内容と関連付けた言語活動を設定すると，児童の知的好奇心に沿った題材をもとにコミュニケーションすることができ，興味・関心をもって意欲的に取り組むことが期待できる。

以上のことから，外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うためには，児童が伝えたいという思いをもって，考え，表現しようとすることが必要であり，英語を用いてコミュニケーシ

ョンを行う目的や必然性がある場面において，他教科等の学習内容と関連付けた児童の知的好奇心に沿った言語活動を設定することが必要であると考える。

２　他教科等の学習内容と言語活動を関連付けた単元づくりについて

(1) 他教科等の学習内容と言語活動を関連付けるとは

吉村達之（2017）は，他教科等の学習内容を英語の指導に関連付ける視点とその手法を３点挙げている。この視点と手法を表１に示す。

表１　他教科等の学習内容を英語の指導に関連付ける視点と手法[1]

視点	手法
①他教科等で出てくる，関連する語彙・用語を盛り込む視点。	すでに学習した，または，これから学習する予定の他教科で扱う平易な語彙や用語，短い語句を英語に置き換えたり，話題にしたりして，関連付けた指導を行う手法。
②他教科等の学習活動（題材）や内容と関連付けたり，それを取り入れたり，発展させたりする視点。	すでに学習した，または，これから他教科等で扱う教材・題材を関連付け，授業内の活動（調べ学習や発表など）に取り入れた指導を行う手法。
③家庭科や体育，図工などの実技教科で，既習事項も含め，発展的内容として授業に英語を取り入れる視点。	他教科等の学習活動において，教師が英語を用いて行ったり，児童が英語を使って活動したりする。

本研究は，外国語活動における指導の工夫であるので，実技教科に英語を取り入れる視点③を除き，視点①②の手法を用いて単元づくりを行うこととする。

また，「ガイドブック」には，他教科等での学習内容を言語活動の題材に生かした場合，そのことについての知識を多くもっている児童は，伝えたい内容が多岐に渡ったり専門的になったりし，それを表現するための言語材料が難しくなる場合があるので，コミュニケーションを補助する写真等を準備するなど複雑化しがちな言語材料への指導・援助を適切に行う必要があると示されている。

先ほど述べた視点①②に基づけば，様々な教科や教科以外の学習内容と言語活動との関連を図ることができると考えられるが，本研究においては，特に教科の学習内容と言語活動を関連付ける研究を行うこととし，理科を例に学習内容と言語活動を関連付けた単元づくりを考える。

(2) 理科の学習内容と言語活動を関連付けた単元づくりについて

所属校は，豊かな自然に恵まれた緑多い地域にあり，児童は，自然に親しみながら育ってきている。１学期に理科で学習する「春の生き物」「夏の生き物」の単元では，学校周辺で見られる虫や植物について詳しく観察したり調べたりしている。

児童はこの学習を通して様々な驚きや発見に出会い，知的好奇心が育まれている。そこで，外国語活動の時間において，この学習内容と関連付けた言語活動を設定することで，児童の英語への知的好奇心を刺激し，言語活動に対する意欲がより高まると考える。

具体的には，導入でＡＬＴに母国の自然について紹介してもらい，外国の生き物と日本の生き物の共通点や相違点に気付かせる。そして，理科で学習した身近な生き物の中で，自分の好きな生き物をＡＬＴに紹介するという単元のゴールの言語活動を共有する。日本の生き物についてよく知らないＡＬＴに「自分の好きな生き物のことを教えたい。」という英語を用いてコミュニケーションを行う目的や必然性のある場面で，児童は相手意識をもち，興味・関心をもって意欲的に言語活動に取り組むことができると考える。

また，この言語活動で扱う言語材料は，視点①②に基づくものとする。理科で学習した身近な生き物の名前や関連する場所等の語彙を扱うことで，児童は興味・関心をもち，進んで英語表現を覚えようとしたり使おうとしたりすると考えられる（視点①）。さらに，自分の好きな生き物について伝える内容は，理科の学習で得た知識や経験が活用できる。理科の学習での成果物などの活用も考えられる（視点②）。ただし，扱う言語材料については，児童の発達段階を考慮して精選する。語彙については，frog, dandelionなどの身近な虫や草花の名前やcute, strongなどの様子を表す言葉を扱う。そして，表現については，I like ~ .　Do you like ~ ?　It’s ~ . の既習の表現やそれに近いものを扱う。It’s ~. の表現は，新出の言語材料であるが，日本語で日常よく使われているものであるとともに，ジェスチャーも取り入れやすい。

これまで述べてきたことを基に，本研究の構想を図１に示す。

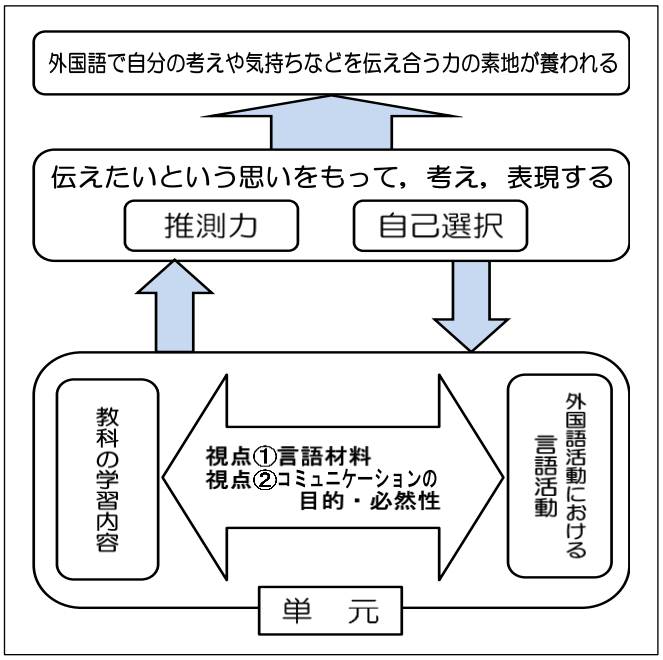

図１　本研究の構想図

Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

教科の学習内容と言語活動を関連付けた単元を構成すれば，児童は外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことができるだろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法について，表２に示す。

表２　検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
①自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことができたか。 ・「誰に」「何のために」伝えるのか意識した。 ・推測して聞いた。 ・表現する内容や表現方法を自己選択し，自分なりに工夫して伝えた。	行動観察 事前・事後アンケート 振り返りシート
②理科の学習内容と言語活動を関連付けた単元では，児童は，知的好奇心に沿った題材について伝え合い，興味・関心をもって意欲的に取り組むことができたか。	行動観察 事前・事後アンケート 「甲田町生き物大作戦」の学習を終えてアンケート 振り返りシート

Ⅳ　研究授業について

○　期　間　令和元年６月28日～令和元年７月５日
○　対　象　所属校第４学年（21人）
○　単元名　甲田町の生き物を紹介しよう
　　「甲田町生き物大作戦」

○　単元の目標

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 ・ＡＬＴに甲田町の生き物を好きになってもらうために，自分の好きな生き物について，外国語を使って積極的に尋ねたり答えたりしようとする。
【外国語への慣れ親しみ】 ・外国語を使って好きな生き物について尋ねたり答えたりする表現や，好きな理由を伝える表現に慣れ親しむ。
【言語や文化に対する気付き】 ・イスラエルと日本の生き物の共通点や相違点に気付いている。

○　単元の評価規準

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 ・相手が伝えようとしている生き物について推測力を働かせて聞いたり，伝えたい生き物の語彙や表現が分からない場面でも，ジェスチャー等で工夫して伝え合ったりしようとしている。
【外国語への慣れ親しみ】 ・外国語を使って好きな生き物について尋ねたり答えたりする表現や，好きな理由を伝える表現に慣れ親しんでいる。
【言語や文化に対する気付き】 ・イスラエルと日本の生き物の共通点や相違点に気付いている。

○　単元計画（全５時間）

時	○目標　・本時で扱う主な表現　◆学習活動など
1	○イスラエルと日本の生き物の共通点や相違点に気付く。 ◆イスラエルの生き物について話を聞く。 ◆単元のゴールを知る。 ［単元のゴールの活動］ 「甲田町の生き物を紹介しよう ～甲田町生き物大作戦～」 ○生き物の英語での言い方に慣れ親しむ。 ・frog, beetle, morning gloryなど
2	○様子を表す言葉や表現に慣れ親しむ。 ・I like ~ .　It's ~ .　strong, cute, smallなど
3	○自分が好きな生き物について，尋ねたり答えたりして伝え合う。 ・Do you like ~ ?　Yes, I do.　No, I don't.
4	○相手に伝わるように工夫しながら，自分の好きな生き物について伝えようとする。 ○自分の好きな生き物について紹介したいことを考え，その表現に慣れ親しむ。 ◆好きな生き物別のグループに分かれ，伝えたいことを英語で表現するにはどうしたらよいか考える。
5	○相手に伝わるように工夫しながら自分の好きな生き物についてＡＬＴに伝えたりＡＬＴの質問に答えたりしようとする。 ◆好きな生き物のグループごとに，みんなの前でＡＬＴに紹介したり，ＡＬＴの質問に答えたりする。

Ⅴ　研究授業の分析と考察

１　自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことができたか

(1)「誰に」「何のために」伝えるのか意識したか

図２は，「外国語活動の時間では，今日の学習のめあてを考えながら活動しています」という設問に対する事前・事後アンケートの結果を比較したものである。

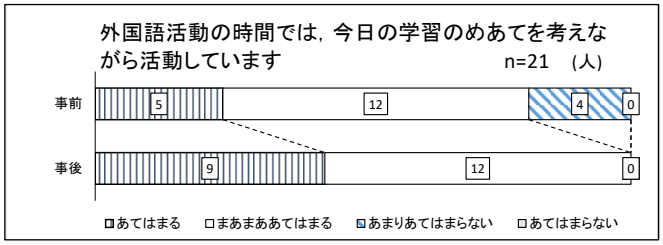

図２　事前・事後アンケート結果

事前アンケートでは，否定的回答をした児童が４人いたのに対し，事後アンケートでは，全員が肯定的回答をしている。

また，事後アンケートの「どの授業でも，単元のゴール『甲田町生き物大作戦をしよう』を考えながら活動しました」の設問に対する回答においても，Ａ児を除く全員が肯定的回答をしている。しかしＡ児は，単元のゴールの言語活動後の振り返りに，ジェスチャーを交えて話すことで伝わるように工夫したと記述している。また，それまでの活動でも，実物を見せて話す工夫をしている様子が見られることから，学習のめあてやゴールの活動を意識して取り組んでいたことが考えられる。

また，肯定的回答をした児童20人中15人の回答には，「ＡＬＴに英語が伝わるといいなと思いながら活動した。」「ＡＬＴに分かりやすいようにジェスチャーや指さしをした。」「ＡＬＴに自分の好きな生き物のことを教えたいと思いながら活動した。」といった記述があった。

これらのことから，児童はＡＬＴに甲田町の生き物のことを伝えたいという目的意識や相手意識をもって意欲的に取り組めたと考えられる。

(2) 相手の言いたいことを推測して聞いたか

ア　行動観察から

紹介したい生き物としてカメを選んだグループでは，カメは日光浴，散歩，昼寝が好きなことを伝えたいと考えた。しかし，児童はそれらの英語を知らないので，「日光浴」は「sunny」，「昼寝」は「I'm sleepy.」，「散歩」は「walk」に置き換えて，さらにジェスチャーも加えて伝えていた。詳細については，次頁表３に記す。

そして，そのカメを選んだグループの発表の様子を見ていたＢ児は，その言わんとすることを言い当てることができた。これは，既知のカメの習性や言葉とジェスチャーを結び付けて推測したためと考えられる。また，単元のゴールの活動の中で，ＡＬＴがそれぞれのグループの児童に簡単な質問をしたり，感想を言ったりというやりとりを行った。以下は，カメを選んだグループとＡＬＴのやりとりの様子を示したものである。

ＡＬＴとのやり取りの様子（一部抜粋）

Ｃ１：I like turtles.
Ｃ２：It's small.　It's cute.
Ｃ３：Sunny.　I'm sleepy.　Walk.（ジェスチャー）
ＡＬＴ：Oh, turtle likes sunny.
Ｃ３：Turtle food.（餌の袋を持って言う）
ＡＬＴ：Oh, it's turtle food.　It ate food.
　　Is a turtle slow or fast?
Ｃ１２３：？？？
ＡＬＴ：（ジェスチャーをつけて繰り返す）
　　Slow or fast?
（やりとりを見ていた他の児童から「あ，分かった。速さのことだ。」とヒントとなる声が聞こえる。）
Ｃ２：（「あ，分かった！」）Slow!!

このように，ＡＬＴの質問にすぐに応じることができなくてもジェスチャーや繰り返し言ってもらうことで質問の意味に気付いたり，それを見ている他の児童が気付いたことがヒントとなったりして答えることができた。他のグループにおいても同様の場面が見られた。また，ＡＬＴの質問の意味を理解して，「yes」や「blue」などの簡単な言葉で答えることができたグループもあった。

これらのことから，児童は伝えたいことを自分なりに工夫し，伝えることができた。また，ＡＬＴの質問にも推測力を働かせて聞き，答えることができた。

イ　事前・事後アンケート，振り返りシートから

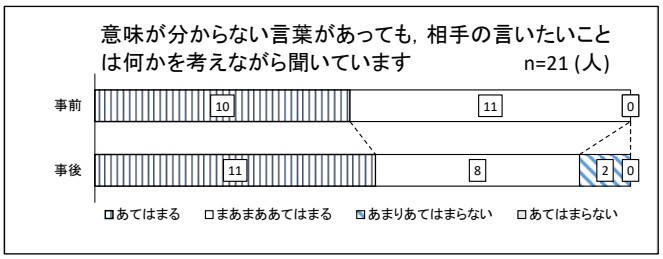

図３　事前・事後アンケート結果

前頁の図３は，「意味が分からない言葉があっても，相手の言いたいことは何かを考えながら聞いています」という設問に対する事前・事後アンケートの結果を比較したものである。

事前アンケートでは全員が肯定的回答をしていたことに対し，事後アンケートでは否定的回答をした児童が２人いる。この２人に聞き取りをしたところ，学習が進むにつれ，英語が分かるようになり，意味の分からない言葉があまりなかったからと答えている。したがって，この２人も含め，全児童がジェスチャーや知っている言葉を頼りに推測して話を聞くことができたと考えられる。

(3) 表現する内容や表現方法を自己選択し，自分なりに工夫して伝えたか

第４時の，相手に伝わるように工夫しながら自分の好きな生き物について伝えようとしている活動の様子と，第５時の，単元のゴールの活動の中で児童がＡＬＴに自分の好きな生き物を紹介する様子を基に検証する。

ア　行動観察から

児童は，それぞれが自分の好きな生き物を選び，生き物別のグループに分かれ，生き物のどんなことを伝えたいか，また，英語を用いてどのように表現したら伝えることができるのかを考えた。子供たちが選んだ生き物は，全９種類で，それぞれ，２，３人ずつのグループになった。

表３　表現する内容や表現方法を自己選択し，自分なりに工夫して伝えている様子

グループ	表現内容や表現方法
ザリガニ	威嚇する→angry　はさみ→（ジェスチャーを交えて）scissorsなど
カエル	よく跳ねること→long jump　など
クワガタ	飼育には水が必要なこと→（霧吹きを持って）water，オス→boy，メス→girl　など
カブトムシ	オス→boys beetle，メス→girls beetle さなぎ→baby beetle，餌→beetle food など
メダカ	赤ちゃんメダカ→baby medaka　速い→fast 速く泳ぐ→fast swimming　透明→clearなど
バッタ	目が黄色いこと→eyes yellow　　など
カメ	餌→（餌を持って，食べさせながら）turtle food，日光浴が好き→sunny like, I’m sleepy, 散歩をする→（ジェスチャーを交えて）walk
ダンゴムシ	手にのせてIt’s ball．落ち葉をfood this　など
アサガオ	写真を見せ，指し示しながら話す　　など

表３は，自分たちの好きな生き物について紹介するために，表現する内容や表現方法を自己選択し，自分なりに工夫して伝えようとしている児童の具体的な様子である。

児童は，それぞれのグループで友だちと相談しながら，「オス」を「boy」，「メス」を「girl」，「幼虫」を「baby」，「威嚇する」は「怒る」と似ていることから「angry」というように，知っている言葉に置き換えて表現する工夫が見られた。また，何を食べるのか伝えたい場合は，「food」と言いながら餌を持ち上げたり，「this」と言いながら実物を指さしたりして動作を交えながら表現する工夫も見られた。さらに，言葉とともにジェスチャーを交えて伝える姿も見られた。

これらのことから，児童は，伝えたいことを，知っている言葉だけでは表現することが難しい場合でも，表現する内容や表現方法を自己選択し，自分なりに工夫して伝えようとしていたといえる。

イ　事前・事後アンケート，振り返りシートから

図４は，「英語で何と言ったらよいのか分からない時でも，自分なりに工夫して，何とか話しています」という設問に対する事前・事後アンケート結果を比較したものである。

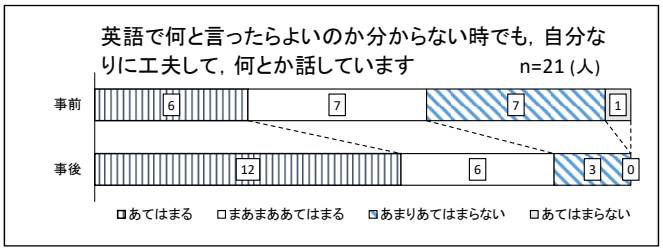

図４　事前・事後アンケート結果

事前アンケートで肯定的回答をした児童は13人だったのに対して，事後アンケートでは，18人になっている。また，否定的回答をした児童が事前アンケートでは８人いたのに対し，事後アンケートでは３人になっている。この３人のうち，Ｃ児とＤ児は，英単語をよく知っており，英語で何と言ったらよいのか分からない時がなかったからと言っている。また，Ｅ児においては，ＡＬＴに紹介する場面で，練習のときのように言葉が出てこず友だちに助けてもらったために，否定的回答をしたようである。しかし，友だちと意欲的に練習しており，その時の振り返りシートには，「練習だったけど上手にできてうれしかった。ＡＬＴに聞いてもらうときも上手に言いたい。」と記述していることから，工夫

して話そうとしていたことが分かる。

また，児童の振り返りシートには，「〇〇さんの発表は，ジェスチャーをしていて分かりやすかった。」や「〇〇くんのジェスチャーの真似をしたらうまく伝えることができてうれしかった。」といった記述があり，児童は，ジェスチャーを使うと伝わりやすいことや，ジェスチャーを頼りに相手の言いたいことが推測できることに気付いて工夫して伝えていることが分かる。

これらのことから，全ての児童は英語で何と言ったらよいのか分からない時でも，自分なりに工夫して話そうとしていたと考えられる。

以上のことから，児童は自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことができたと考える。

２　理科の学習内容と言語活動を関連付けた単元では，児童は，知的好奇心に沿った題材について伝え合い，興味・関心をもって意欲的に取り組むことができたか

(1)　「甲田町生き物大作戦」の学習を終えてのアンケート」の結果から

「甲田町生き物大作戦」の学習を終えてのアンケートの「『甲田町生き物大作戦』の学習は楽しかったですか」の設問では，全児童が肯定的回答をしている。また，表４は，「『甲田町生き物大作戦』の学習のどんなところが楽しかったですか」の設問における児童の記述を分類したものである。この記述内容からは，多くの児童が，本単元の学習において，英語を用いて伝え合うことを楽しんでいたことが分かる。

表４　「『甲田町生き物大作戦』の学習のどんなところが楽しかったですか」における記述内容　　n＝21

記述内容	人数（人）
ＡＬＴに英語が伝わったこと，紹介したこと	9
英語を話したり生き物の名前を英語でどういうか知ったりしたこと	4
友だちと発表したこと	3
ジェスチャーをしたこと	2
その他	3

(2) 事前・事後アンケート，児童の様子から

図５は，全体の事前・事後のアンケート結果の比較を示したものである。

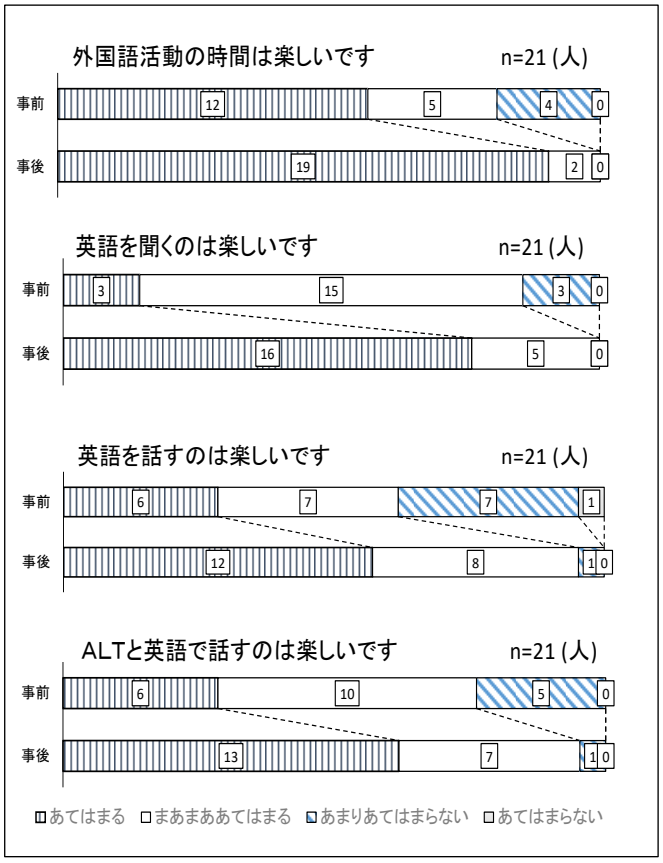

図５　事前・事後アンケート結果

「ＡＬＴと英語で話すのは楽しいです」の設問では「あてはまる」と回答した児童は６人（事前）から13人（事後）に増加しており，否定的回答をした児童は事前では５人いたが，事後では１人となっている。この１人であるＦ児は，否定的回答ではあるが，自分の紹介する生き物であるダンゴムシを放課後も世話をしたり，丸くなってかわいいことをどのように伝えようか友だちと相談したりしていた。そして，単元のゴールの活動時には，ジェスチャーを付けて伝えることができ，振り返りにも楽しかったと記述している。

また，児童は，ＡＬＴの話ややり取りの中で，日本で見られる生き物が，ＡＬＴの母国では見られないものがあることやその逆があることを知り，外国と日本では，四季の有無等の違いがあることに気付いた。そして，自分たちの地域で見られる生き物について積極的に伝えることができた。これは，理科の学習で得た知識とのズレが，児童のコミュニケーションへの意欲につながったためと考える。

以上のことから，理科の学習内容と言語活動を関連付けた単元では，児童は知的好奇心に沿った題材について伝え合い，興味・関心をもって意欲的に取り組むことができたと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　研究の成果

理科の学習内容と関連付けて児童の知的好奇心に沿った言語活動をすることで，児童は，「誰に」「何のために」伝えるのかを意識し，推測力を働かせて聞いたり，表現する内容や表現方法を自己選択し，自分なりに工夫して伝えたりすることができた。したがって，自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことができると分かった。

また，本研究を通して明らかになった，教科の学習内容を言語活動に関連付けた単元を構成する際の留意点である「教科の学習内容の選定」「単元のゴールの言語活動の設定」「言語材料の精選」について，以下に示す。

(1) 言語活動に関連付ける教科の学習内容の選定について

言語活動に関連付ける教科の学習内容は，次の視点で選定する。

①児童の興味・関心が高く，驚きや発見など，伝えたい内容があるもの。

②外国と日本の共通点や相違点に気付くことができるもの。

特に②は，英語を使って伝える目的や必然性をもたせるために大切な視点である。本研究では，ＡＬＴの母国と日本の生き物の共通点や相違点を知ることで児童はより関心を寄せ，英語で伝えたいという意欲をもつことができた。

(2) 単元のゴールの言語活動の設定について

単元のゴールの言語活動は，児童自らが伝えたいという思いをもって，考え，表現しようとすることとともに，何をどのように伝えるのかを児童が考え決められることも重要である。本研究では，児童は，身の回りにいる生き物の中から自分の好きな生き物を選び，その生き物について自分が伝えたいことを考えた。伝えたい内容については，全員で共有するものと，それぞれの児童の思いに委ねるものにした。その結果，児童は，「自分が伝えたいことを英語を用いてどのように表現したら伝えることができるのか」を主体的に考え，自分なりに工夫しながら伝え合うことができた。

(3) 言語材料の精選について

単元のゴールの言語活動と合わせて，次は適した言語材料を精選していく。言語材料を精選する際には，表現や語彙が難しくならないようにするために補助教材等を参考に，児童の思いが伝えられるものを選ぶ。また，児童が伝えたいと思うものであれば，ジェスチャーを取り入れて表現することで，高学年の内容のものでも扱うことが可能である。本研究で扱った，It’s cute.等の様子を表す表現は，高学年で扱う内容であったが，児童が伝えたいことであり，また，ジェスチャーを取り入れやすいものであったため，児童はその表現を積極的に使って伝えようとすることができた。

２　今後の課題

今後は，より実践を重ね，理科の他の単元や理科以外の他教科等の学習内容と言語活動を関連付けた単元づくりを行い，各教科等の特性を生かした効果的な関連のさせ方について研究を深めていく。

また，本研究では，外国語活動における成果は検証したが，理科の深まりについては未確認である。今後は，関連付けた他教科等の学習に対する児童の理解の深まりについても効果を検証していく。

【注】

(1) 吉村達之（2017）：「report６他教科連携の授業への期待と提案（ＣＬＩＬ的な取り組み）」金森強・本田敏幸・泉惠美子編著『主体的な学びをめざす小学校英語教育－教科化からの新しい展開－』教育出版pp. 110-113に詳しい。

【引用文献】

1)　文部科学省（平成29年告示）：『小学校学習指導要領』p. 169

2)　文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂出版 p. 14

3)　文部科学省（平成30年）：前掲書p. 28

4)　文部科学省（平成30年）：前掲書p. 28

5)　文部科学省（平成30年）：前掲書p. 28

6)　文部科学省（平成29年）：「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_1.pdf

7)　文部科学省（平成30年）：前掲書p. 29

8)　文部科学省（平成30年）：前掲書p. 45

9)　文部科学省（平成29年）：前掲書p. 86

10)　文部科学省（平成29年）：前掲書p. 86

【参考文献】

狩野晶子（2017）：『新学習指導要領の展開　外国語活動編』明治図書

吉田研作（2017）：『新学習指導要領の展開　外国語活動編』明治図書

卯城祐司（2013）：『改訂小中連携Ｑ＆Ａと実践　小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂出版

二五義博（2015）：「ＣＬＩＬ（内容言語統合学習）の理論を応用した英語教材の開発－小学校高学年向けに社会科や理科の学習を取り入れた英語活動の実践例－」『学校教育』広島大学附属小学校　学校教育研究会